

するを得しめ、其後は胎兒よりの内分泌液 (foetal hormone) の力によつて性週期を停頓せしめて以つて生殖を完たからしむるならんといふ。

以上を以て oestrous cycle の形相、之が生殖現象との諸關係に就いては略々明かにする事が出来たかと思ふ。LONG, EVANS は最後に然らばこの oestrous cycle は何によつて惹起されるものであるかといふ疑問に到達し之を解かんとして次の實驗を行ふて居る。即ち先づ子宮の全部を切除して見た。所が矢張り oestrous cycle は依然として他の残されたる部分に於いて起る。次に子宮の全部と膈の上部をさへ切除して了つたものでも矢張り同じく oestrous cycle は進行する。子宮丈を除いたものでは生殖門口の機械的刺戟によつて通常のものに見ると同様次の oestrous cycle の出現を遅延せしめる事迄もわかつた。乳腺切除に於いても矢張り oestrous cycle には何等の影響を及ぼさない。で愈最後に行はれたのが卵巢の除去、並びに移植の實驗である。然るに卵巢除去の個體にては完全に且つ永久に oestrous cycle の消失を見る。そこで次に移植の實驗を行つて見た。移植は即ち autotransplantation と homotransplantation とで移植の場所は脾、子宮間膜、腹膜、直筋等であつた。片方或は兩方の卵巢を移植して見るに autotransplantation では移植成功の率高く、homotransplantation では甚だ低い。けれどもとにかく成功したものにあつては oestrous cycle は普通通り何等の變調もなく行はれるのを認めた。只移植してから次の oestrous cycle の現はれる迄五日乃至十二日を要するのみで其後は普通の長さの oestrous cycle が續く。而してこの場合にも生殖門の機械的刺戟は矢張り次の oestrous cycle の出現を長びかせる。LONG, EVANS は oestrous cycle の起因を探ねて遂に此所迄到達し得たのである。

興味深き之等の實驗殊に卵巢除去とその移植との實驗は吾人に何を暗示するであらうか。その暗示によつて提供せられたる新なる問題は吾々の前に解決を促しつゝ横はつて居るかの如く見ゆる。

雜 錄

天 草 雜 俎 (そ の 一)

大 島 廣

1. 寒雲丹

天草富岡の名産に寒雲丹と云ふものがある。十二月から二月頃にかけて採取した海膽から製造すると聞いて居たが、恐らく Fettdegeneration をした萎縮し

た生殖腺を原料とするものだらう位に思つて居た。然るに去る一月上旬此の地の M 氏方で『無鹽』の雲丹を食膳に見るに及び、如何にも熟し切つた生殖腺らしく見えたとに驚かされた。その原料となる動物を取寄せて見ると正にムラサキウニである。M 氏の説明によると寒中舟か、窺きを用ひ、石を起し又手を以つて捕るので、荒天には出来ない仕事だから原料が多く獲られず各地の注文に應じ切れぬ事が屢あると云ふ。そして餘り大形の海膽では色が悪いから若い海膽を擇ぶと云ふ事であつた。之は多分老齡の者には生殖腺に色素が沈着すると云ふわけであらう。富岡町では毎年五月十一日から十二月十日迄ムラサキウニの漁獲を禁じて保護を加へて居るが、他地方で春又は夏に海膽を採取するのと較べて著しく變つた事である。此の海膽の生殖腺が六七月頃に成熟する以外に、斯かる寒い時期にも今一度生殖期があるのであらうか、今後の調査を要する。

2. 月夜の蟹

四月六日(閏二月十六日)鯛網に懸つたと云ふタカアシガニを貰つた。體表一面、さては鰓室の中迄一種のエボシガヒが着生して居り、實驗所に運び込まれた時はまだ動いて居たとの事。さて肉を啖ひ且つ標本を作らうと云ふので、脚を外し、甲と共に煮て食卓に持つて來た迄は良かつたが、徐ろに甲良を除き内部を検するに及んで全く空虚な事を發見して一驚を喫した。肉と云ふ肉は絲の如く細く、肝臓などは全く何處にあるか見當らず、胃が宙に浮いて居るを見るのみ。恰も誰かが極めて巧妙に肉を抜き去つたのでもあるかの様で、折角酢醬油など準備して大に試食しやうと待ち構へた面々暫く啞然として開いた口が塞がらなかつたものである。月夜の蟹に肉無しとの云ひ傳へは果して真か。之も今後氣をつけて見なければならぬ。

3. 渦虫とキシャゴの闘争

同じく四月六日の所見。富岡灣南岸の廣い砂の干潟に、漣紋の間、引き残つた僅か許りの水の中を一寸許りの海プラナリアが勢よく駆け廻り、所々キシャゴが跳躍するを見かける。注意して見ると、此の兩者の間には到る所驚く可き活劇が演ぜられてゐる事を知つた。プラナリアはキシャゴを嗅ぎ付けるかの如く執念深くその跡を逐ひあるき、その速度は彼に優れて遂にその體の前端が彼の足の後端に觸るゝと見るや、キシャゴは痛みに堪へぬかの如くに跳ね上り、長い足を伸ばしてのた打ち廻る。斯くして生じた少許の間隔も再びプラナリアの勢ひ急なる進撃で狭められ、第二撃を加へられたキシャゴは再び跳り廻る。斯かる事を繰返す事三四度になるとキシャゴは終に力を失つて動かなくなり、プラナリアは怪物の如くに彼を覆ひ包み、兩者一團となつて砂中に潜り込んで了ふ。

4. 烏賊の雌雄

ダアシ・タムスン教授の記事に伊太利の漁夫がマイカの雌雄を容易に識別すると云ふ事を紹介したが(別項)、天草の漁夫の云ふ所も之と一致し、雌は小形で雄よりも丸味を帯びて居ると云ふ。六月末頃海岸の石を覆して見ると此の烏賊の卵嚢が葡萄の房のやうに石の下面に附着して居り、その色が悪くなつて居るものには大小種々な程度に卵黄嚢を附けた幼烏賊が動いて居るのを透して見る事が出来る。

5. 海膽幼蟲の飼育

天草臨海實驗所開所早々の研究者として京大理學部學生小野田勝造君來場、銳意海膽幼蟲の飼育を試みて居たが、ムラサキウニが最も成績良く、遂に六月二十九日夜、その最も早き若干が芽出度く變態を終つて稚き海膽になつた。五月二十四日の人工受精から算へて正に三十七日目である。筆者の知る範圍では之は日本に於いて變態迄海膽幼蟲を飼育し得た最初の記録であるが、此の興味ある研究に關しては之以上の報知を差控へ、他日小野田君自身によつて發表せられるのを待つ事とする。

6. 光る海牛

六月五日の夜、平岩氏が鰯の網に引懸つて盛に發光する小動物を持ち歸つて見たら、一種のウミウシであつた。神田左京氏が房州で見られたもの(本誌四七三號、一〇二頁)と同じものであらうか。

7. 柔い海膽

エキノツリア科に屬する柔い海膽、所謂フクロウニが折々かせあみに掛る。鋭い棘がとても危険なので漁夫等は怖れて持ち歸らない。底曳網の利かぬ岩礁の間に棲むものらしく、そして夜の間に多少匍ひ廻るものと見えて自分で網に纏ひつくのであらう。

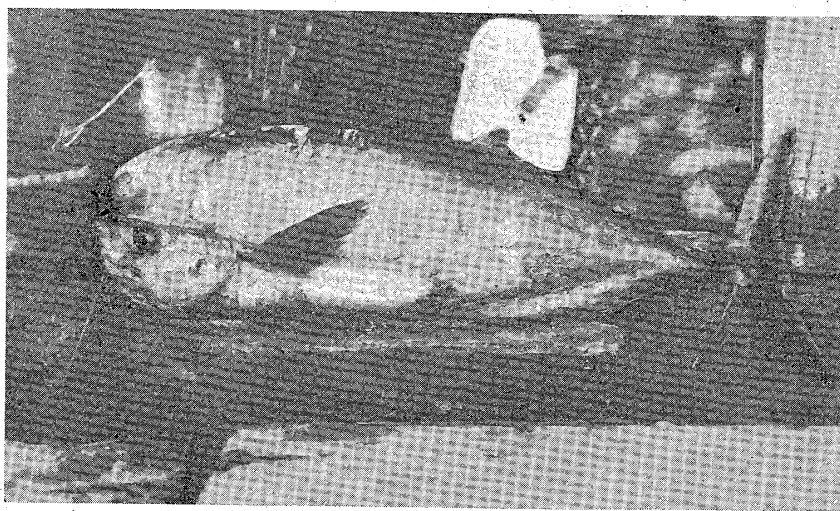
8. 腕足類の仔

七月初めの上曳網には幼蟲が頗る賑かで、數種のウニ、ブンブク、クモヒトデ、ヒトデ、ナマコ等の幼蟲をばじめとし、螺類、二枚貝、多毛環蟲、海鞘などの仔、中にも *Mitraria*, *Nectosoma*, *Cyphonautes*, *Actinotrocha*, *Pilidium*, Müller 氏幼蟲が折々見られる。稀にメクラジャの幼蟲に似て少しく異つたものが出て来るが、殻は楕圓を帯びた圓形で耳の如き突起無く、長徑 0.3 耗、短徑 0.25 耗、cirri は四對出來て居るが後縁の附近から兩側に向つて二乃至四對の長い剛毛(setae)を生じて居る。その長さ 1 耗を超え、細かい棘を生じ、體が收縮するとき斜に前方に向ふが、體を伸ばす時は反轉して甚しく後方に向ひ殆ど平行になる。別に殻(外套膜?)から生ずる一對の細く短い毛があるが勿論上記の

如き動き方をしない。斯様な幼蟲は谷津博士が *Discina* の幼蟲として描かれたものに稍、類似して居る所から、矢張り之に近似の腕足類の仔だと考へられるが、手許に文獻が無い。此の地では今委しい事は判らない。

9. 人面の魚

四月下旬平岩氏の不在中、近海で網に入つた怪魚が當地の魚市場を騒がせたさうだ。古老の誰もが見た事が無い。胴體は鮪であるが頭が丸く人面に似、



不思議にも眼の上に口が開いて居たと云ふ。惜しい事に側面から見た寫眞のみが残されて居るので、勿論吾々にも鮪の片輪かと云ふより外には判斷がつかない。人々は此の無氣味な頭をば切つて捨て、胴を熊本に送り、同地では鮪と稱して無事に賣れたと云ふ。

10. 異國氣分に富む天草

日本でこそ天草は西海の邊陲であるが、長崎がぢき隣りであり、支那は一葦帶水の對岸だから外國との交通は昔から頻繁で、殊に輸出婦人の本場である事は誰知らぬ者もない。富岡の夏は上海、青島あたりから家族連れで避暑に来る連中多く、毛色の變つた F_1 , F_2 が日本の子供等と一緒に遊んで居るのを見かける。父が佛人で、叔父に蘭人をもつ J と云ふ青年が、國籍の異つた從弟達と一緒に實驗所に遊びに来る。皆下卑た所も無くよい英語を話す。天草上島のどこかには一人の日本人の母から生れ、長兄は印度人を、次弟は佛人を、末弟は支那人を父に持つた F_1 共が歸つて來て居るとの事。人類雜種の研究家は來て見るがよからう。富岡の町には天草女を妻とした老獨逸人が長らく住んで居る。近所の村には加特力カトリカの宣教師で殆んど土着の如くなつた佛人がある。汽船宿には佛蘭西語を喋る若衆が居る。實驗所の小使は長く浦鹽、ハバロフスクに住んで居た男で自由に露西亞語を話す。一度は伯林迄も行つた事があるとか。最

後に、實驗所主任の平岩理學士が米國仕込みの事は諸君先刻御存知。

(七月六日、富岡にて)。

[追記] 原稿を編輯委員に送つた後、以上の記事には二箇所訂正を要する事を知つた。

第一に『人面の魚』なるものは片輪などでは無く *Luvarus imperialis* と云ふ魚だと云ふ事。『珍魚』と云ふ事は許して貰へるかと思ふ。兎に角専門家の教を乞はずに書いて終つた輕卒の罪を謝さねばならぬ。そして田中氏の手で此の魚に就いての一寸した解説を書いて頂くやう希つて置く。

第二は、海膽の仔を變態迄飼つたのは吾邦には前例が無いと信じて小野田君の最初の記録だと申した事の取消しである。既に久米女高師教授が三崎でスカシカシバンで成功された相で、左様な事はあからさまに發表されなかつた事として今日迄知る由も無かつたとは云へ、ウニに就いては萬更あかの他人でもない小生が知らずに居た迂濶さをば顔をあかくしてお詫びして置く。

Luvarus imperialis RAFINESQUE

此魚は從來、地中海、キャリフォルニア沿岸、ニュウサウスウェールズ等に於いて漁獲せられたるも、何れも「極めて稀なる」魚として記載せらる。我國にては今より凡そ十五年前、東京魚市場(當時、日本橋にあり)に相當大形のもの一尾來れり、余の採集家、故清水金太郎(通稱金兵衛)が日本橋側の或魚屋の買ひ取れるを報知し來れる爲め、直に行つて見たるも、何分、諸體部殊に口邊の頗る損傷せるを見て、余は残念に思ひたることあり。第二回の報告は爰に書かれたるものにて、ただ寫眞のみを見るを得るは返へすがへすも残念なり。されどその比類なき特徴は一見して本種なることを知るを得べく、本種又は本科に他に別種あるべしとは大體思はれざれば、今回の標品は余の見たる本種の第二回目のものであるべし。更に注意すれば時々魚市場又は漁村に見るを得るなるべし。

(田中茂穂記)

抄 録

パラメシウム培養液に對する土壤の効用

ANDREJEW, E.—1928. Über den Einfluss des Bodens als einen Regulierungsfaktor des Mediums auf die Kultur *Paramaecium aurelia*. Arch. für Protistenkunde. LXIII. ½. s. 94—104.

淡水の微生物を人工の培養液の中で飼ふと、急に増殖したり、また、急に死んで居なくなつたりする事が見られるが、これは培養液の性質が變りやすいた